

白浜三番叟の魅力



神前の舞では、凛とした空気が張り詰める

三番叟とは

三番叟は能楽から派生した舞で、白浜では戦前まで両親健在で未婚の長男しか演ずることができなかったようですが、現在ではその枠にとらわれず、地元の有志が参加しています。

翁、黒面、千歳と呼ばれる踊り手3名、大鼓1名、鼓3名、笛2名、影打（拍子木でリズムを付ける役）1名の計10名で行われ、原田、長田、板戸区の白浜3地区で1年ごとに交代で当番が回ってきます。

三番叟は五穀豊穡、家内安全などを祈るもので、18世紀の記録に白浜の農民の間で4～5年に一度三番叟が舞われていたとあります。

その伝統や格式から昭和48年6月12日に「下田市指定無形文化財」に登録されました。

白浜のみならず、下田市にとっても大切に、今後も守っていききたい「下田まち遺産」です。



千歳



躍動感溢れる黒面の舞



舞う直前、漂う緊張



指先まで伝う集中力



翁



黒面

演舞者インタビュー ～今年の三番叟を終えて～

やまもと しんすけ
山本信介さん(黒面)

練習は、歳の離れた師匠と一体となって本気で向かい合う、とても大切な時間だと感じました。

先輩方は自分の持っているものを少しでも多く伝えよう、良い演舞が出来るよう、真剣に演舞者と向き合ってくれました。

三番叟は、今もこれからも白浜にとってとても貴重な財産です。そして何より地域の縦の繋がりを作る大切なものだと思っています。

平成最後の三番叟を今回の師匠の方々、演舞者の仲間とやれたことを本当に幸せに思います。



～本番に至るまでの道のり～

9月初旬から1か月半、過去の三番叟経験者を師匠に仰ぎ、若者たちは激しい練習を繰り返します。

指先、抑揚、細かい指摘。素人目では気付かないようでも、厳しくもあり、優しくもある的確な師匠の指導を受ける前と後では全く違う舞やリズムの変化に驚かされました。



一挙手一投足を見逃さない、そして受け継がれていく伝統

下田認定まち遺産の一つ、「三番叟」は白浜地区で毎年10月29日に行われ、約300年続くといわれる伝統行事です。

伝統あるこの行事も過去何度か中止の憂き目を見るなど様々な困難がありましたが、今日まで脈々と受け継がれる、誇り高き「下田まち遺産」です。

今回、練習から本番まで取材を行い、三番叟の魅力、地域の力などを通じて下田まち遺産の大切さをお伝えします。

問合せ先 建設課都市住宅係 ☎2219